

# 眼 科

## 1. 基本研修体制

- 1) 2年間の研修期間は、個々の希望を調節しながら眼科の研修を行ない、さらに麻酔/救急、周産期・小児科、その他の選択研修を通じて一般臨床の基礎を習得する。
- 2) 研修オリエンテーション以降の個々のプログラムは、各人の希望を尊重し当科の責任において、当該科・関連病院との協議をもとに研修センターを調整の核として作成され柔軟に運用される。
- 3) 初期1年間は旭川医科大学病院内での研修を中心とし、後半の1年間は各人の希望を最大限に取り入れ、多様性に富んだ研修としたい。
- 4) 特に希望する者は、選択期間中に地域医療研修を選択することができる。

## 2. 研修目標

- 1) 教育理念：眼科医を志す研修医が将来目標とする眼科医像は多様である。眼科臨床のジェネラリストを目指す者、角膜や網膜硝子体疾患などの専門分野でのスペシャリストを志す者、あるいは眼科学・視覚科学の基礎研究に従事する者などである。卒後初期研修では眼科医としての基礎を確立するとともに、各研修医が目標とする眼科医像へ邁進するための基本を身に付けることを教育の基本理念としている。さらに、研修医の夢が実現できるように教育、チャンスを提供し、手術ができる眼科外科医の育成、各分野でのスペシャリストの養成、海外留学の機会を与え国際的な眼科医の育成を教育方針としている。
- 2) 臨床における到達目標：眼科領域における各種疾患および外傷に適切に対応できるよう基本的な診察能力を身に付ける。得られた情報を整理・統合し、診断に必要な検査計画を立て、その結果を解釈し、患者の病態を総合的に捕らえ、最良の治療方針を立て、十分なインフォームドコンセントを得て実行できることを目標とする。さらに眼科手術の基本を修得することを目標とする。

### 行動目標1

眼・視覚系疾患について鑑別診断・初期治療に必要な検査・処置に対する知識・手技を習得し、疾患の把握に必要な所見を得ることができる。基本的手技の適応を決定し、実施するために以下の検査・処置を習得する

- ・視力検査・屈折検査
- ・眼位・眼球運動検査
- ・眼圧検査
- ・視野検査
- ・眼底検査
- ・点眼手技・眼軟膏点入手技・創処置(洗眼・眼帯)

## 行動目標2

日常遭遇しうる眼疾患の鑑別診断・初期治療を的確に行うことができる。そのために以下の経験すべき疾患・病態を挙げる。

- ・屈折異常と調節異常(近視・遠視・乱視・老視)
- ・眼位・眼球運動の異常
- ・眼瞼・涙器の障害
- ・角結膜炎 角結膜の障害
- ・白内障
- ・緑内障
- ・糖尿病性眼底変化 高血圧・動脈硬化性眼底変化
- ・黄斑部疾患

## 行動目標3

眼科領域の緊急を要する症状・病態を理解し救急治療を的確に行うことができる。そのために以下の経験すべき疾患・病態を挙げる。

- ・急性緑内障発作
- ・角結膜異物飛入
- ・眼球打撲・眼外傷
- ・角結膜化学熱傷
- ・一過性黒内障を含む急性の視力障害

- 3) カンファレンスや症例検討会、あるいは学会での発表を通じて、症例を科学的に考察し、議論できる姿勢を身に付ける。
- 4) さらに研修後半では、指導医の行う基礎・臨床研究に加わることで研究者として必要な基本姿勢を身に付けることを目標とする。

## 3. 研修スケジュール

選択研修は旭川医科大学眼科での研修および大学外の研修病院眼科での研修を合わせて最大13ヵ月となる。

## 4. 短期研修用プログラム

当科で短期研修(3ヶ月)を希望する者に対しては、その要望に応じて研修を行う短期研修プログラムを適応する。到達目標を明確にし、短期間で有意義な研修が行えるように配慮する。

## 5. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金
午前	医局抄読会(隔週) 新患外来 糖尿病外来	手術  緑内障外来 病棟回診	新患外来  糖尿病外来	手術  病棟回診	新患外来  糖尿病外来
午後	眼循環外来  角膜外来  病棟回診 症例検討会	手術	ぶどう膜炎外来  斜視弱視外来  病棟回診	手術  屈折矯正手術外来	眼循環外来 黄斑疾患外来 角膜外来 病棟回診 病棟医療従事者連絡会(月1回)

眼科指導責任者 吉田 晃敏 学長  
 石子 智士 教授 (寄附講座)  
 木ノ内玲子 准教授 (寄附講座)  
 長岡 泰司 准教授  
 花田 一臣 特任講師 (寄附講座)  
 高宮 央 講師  
 佐藤 栄一 講師  
 川井 基史 講師 (学内)  
 村松 治 講師 (学内)  
 横田 陽匡 講師 (学内)  
 西川 典子 講師 (学内)  
 高橋 淳士 講師 (学内)  
 指導教員数計 : 15 名